
幻想

parfume

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想

【Nコード】

N3785C

【作者名】

parfume

【あらすじ】

毎日を遊びで充実させていた大学生、竜弥の20歳の誕生日。誕生日を祝いに来た彼女と別れてしまい、無気力な日々を送っていた。そんな竜弥の価値観を揺るがす出会いが訪れ、竜弥の人生に迷いが生じ…。

別れ

猛暑が続く8月7日、大学も夏休みに入り、毎日遊び歩いていた僕は21歳の誕生日を迎えた。

飲み会、コンパ、サークルの合宿、海水浴、花火大会…。

遊びなんて山ほどあった。

それがきっかけで違う大学に通う同い年の彼女の美紗樹と、別れてしまったのは予想外だったが。

午後2時。昨日も深夜まで友人達と飲んでいた僕は、携帯電話の着信音で目を覚ました。

着信は美紗樹からだった。

「もしもし、美紗樹？」

「竜弥、寝てた？ごめんね」

「ああ平気。どうした？」

「今、駅まで来てるんだけどこれから行ってもいい？」

「いいよ。駅まで迎えに行こうか？」

「近いから大丈夫。じゃあ行くからね」

一人暮らしをしている僕の家には、美紗樹はよく遊びに来た。僕は顔を洗い、歯を磨いて彼女の到着を待つことにした。

インターフォンが鳴り彼女を迎え入れた。

「今日誕生日だね、おめでとう！」

彼女は買って来たケーキを差し出した。

「ありがとう」

ケーキを受け取り、彼女に座るよう促した。

コーヒーを淹れ、貰ったケーキを皿に移しテーブルに置いた。

僕も椅子に座り彼女と向かい合うと、彼女は笑顔で僕を見ていた。

「お誕生日おめでとう！」

「ありがとう。そういえばメールもくれたよね」

「うん、返事来なかったけどぉ」

ちよつと嫌味っぽく皮肉を込めて言われ、僕は苦笑しながら軽く謝った。

二人でケーキを食べながら、他愛もない話をした。

テレビの話だったり、お互いの大学の話、友達の話だったり…。

そして何てことない話の流れから、昨日の話になった。

「そういえば、昨日なにしてたの？」

彼女にそう聞かれ、一瞬嫌な予感がした。

「昨日はバイト終りに皆で飲みに行ってた」

この手の話になると決まって彼女は機嫌が悪くなる。

「ふーん、皆って？」

もう既に彼女の笑顔は消えた。

「シフト一緒だった人達、6人くらい？」

「女の子もいたの？」

「あー…、うん」

ここで「いなかった」と言えば、彼女の機嫌が良くなるのは解っていた。

けれどそう言わなかったのは、僕の中で彼女に対する感情に変化が起きていたからだろう。

僕の答えに案の定、彼女は怒り出した。

「私と会う時間は取れないくせに、他の女の子と飲みに行く時間はあるんだね」

別に女の子と飲みに行った訳ではない。

飲みに行ったメンバーの中に女の子がいただけのこと。

そう思ったけど、口には出さなかった。

彼女の文句は止まらない。

僕は反論もせず、煙草を手に取り火を点けた。

「聞ってるの!？」

普段可愛い彼女が、こんな時は別人に見えてしまう。

「あー、聞ってるよ!」

彼女につられて、口調がきつくなる。

僕の言葉に怒っていた彼女は泣き出した。

彼女は怒りながら感情が昂るのか、途中から涙声になり目を潤ませていた。

付き合って1年、何度かケンカしたが原因はいつも一緒だった。

彼女の怒って泣き出すまでの流れも、把握していた。

それは彼女も同じだっただろう。

彼女が泣き出したら「泣くなよ、もー…。ごめん」と半分投げやり

気味に僕が謝って、ケンカが終わる。

それがいつもの2人の流れだった。

でも今日は違った。

泣き出す彼女に対して、急激に僕の気持ちは冷めていった。

何だか全てが面倒になってしまった。

僕が謝らないものだから、彼女も引き際が解らないのだろう。

泣きながら僕を罵り続けていた。

煙草の火を消し、僕は口を開いた。

「美紗樹、別れようか…」

彼女はひどく驚いた顔をして、僕を見た。

どのくらいだろうか、しばらく沈黙が続いた。

お互い俯いたまま。

彼女の肩が震えているのが目に入り、僕はますます俯いてしまう。

先に沈黙を破り、声を発したのは彼女だった。

「ばか！最低！！」

そう怒鳴って彼女は出て行った。

僕は彼女を追うこともしなければ、背を向けたまま玄関を振り返ることもしなかった。

椅子から立ち上がって、窓を開けると、うだるような夏の暑さ。

それでも僕はエアコンを切って空気の入れ換えをすることにした。

さっきまで彼女が座っていた椅子に座り、煙草を吸った。

額に汗を感じながら、ボーっとしていた。

煙草の煙が窓から逃げて行く、その様子をただ眺めていた。

何もしたくなかった。

結局、彼女に「ごめん」と謝ることもないまま別れた。

彼女が嫌いになった訳じゃない。

好きだった、でも面倒に感じた僕がいた。

予想もしていなかった彼女との別れだった。

実感

美紗樹と別れて一週間が過ぎた。

別れる前とたいして変わらない毎日。

相変わらず僕は遊び歩いているし、一緒に暮らしていた訳でもない
ので、生活スタイルが変わることもない。

ただ、もう理由がないと会うことができなくなっただけ。

まして別れを切り出したのは僕の方だ。

独りになった寂しさから、別れを後悔しても遊びに出れば、それも
忘れてしまう。

ただ、解放感と寂しさが自分の中で同居して、ひどく孤独を感じて
いた。

「彼女と別れたんだって？」

居酒屋で2杯目のビールに口をつけながら、同じ大学の駿が聞いた。

「あー、うん。誰に聞いたの？」

別れた実感があまりなかった僕は、まだ誰にも別れたことを話せず
にいた。

「この前、渋谷で彼女とその友達に会ってさ。2人にお前の文句言
われた」

「マジ？ごめん」

「いや、俺はいんだけど、お前は大丈夫なのかと思って今日飲みに
誘ったんだよね」

ビールを飲み、ツマミを口に運びながら駿は軽い口調で言った。

駿はいつもそんな感じ。

優しさが押し付けにならないように、あえて軽さを出す。

そんな駿の優しさが不安定だった心に染みて、ようやく僕は彼女と
の別れを実感した。

なんだ、結構大事に想ってたんじゃない…美紗樹のこと……。自分の気持ちを振り返り、それでももう付き合う意志のないことを確信する。

「ありがとな。俺はふっ切れたから大丈夫だよ」

そう、今まさにふっ切ることができたのだ。

出違い

連日続く記録的な猛暑の中、僕はバイトに精を出していた。とは言ってもバイト先のカラオケボックスは外の熱気など忘れてしまうほど涼しい。

「竜弥、店の前の通り沿いにあるバー、知ってる？」

事務所で休憩をしている僕に、出勤してきたばかりのバイト仲間と同じ年の圭祐が聞いてきた。

圭祐は可愛い子に目がなく、飲食店やアパレルショップなどありとあらゆる所で自分のタイプを見つけてきては、僕を誘って遊びに行く。

「あの子、可愛くねえ？」などと、お目当ての女の子を僕に教えてくれる。

圭祐は必ず、お目当ての女の子に声を掛ける。

でも、声を掛けて仲良くなったとしても付き合うことはない。

彼には大事な彼女がいるから。

なんでも、高校からの付き合いらしく4年も続いているのだとか。

そんな彼女とも今は東京と海外で遠距離恋愛中。

彼女は高校卒業後アメリカに留学し、残された圭祐は寂しさから浮気を繰り返す。

「待たなくていい」と言う彼女を、勝手に待っている圭祐。

彼にとつては浮気でも、彼女にとつては浮気でも何でもないのではないかと僕は思ってしまう。

彼女にとつては、圭祐はもう「過去の男」になっているかもしれないからだ。

彼女の話圭祐から初めて聞いた時、
「それ、終わってるんじゃない？」

と思わず口にしたら圭祐が本気で落ち込んだのをよく覚えている。多分、本人も解っている。自分は振られたのだと。でも、気持ちの整理がつかないのだろう。

「そのバーに、可愛い子でもいたの？」

僕がニヤニヤしながら聞くと、圭祐は興奮気味に答えた。

「可愛いなんてもんじゃないやねーよ！ヤバイよ、あれは！！」

「そんなに？」

圭祐の答えに、僕は興味をそそられた。

「うん！今日バイト終わったら行こうぜ」

「ああ、楽しみにしてるわ」

じゃあ後で、と身支度を終えた圭祐は事務所を出て仕事を始めた。

僕は残りの休憩時間を消化し、バイトの終了時間を楽しみに仕事に戻った。

今日のシフトは、僕が15時入り22時終わり。

圭祐は18時入りで終わり時間は僕と同じだった。

勤務終了とともに2人で、バイト先を足早に出た。

「よし！行きますか！」

圭祐の浮かれた声に僕も浮かれた声で返事をした。

圭祐の案内で、噂のバーへ向かった。

地下にあるそのバーは、21歳の僕らには場違いな気がするほど落ち着いた店内。

渋谷にこんな落ち着いた場所があったのか、と感心してしまった。

店内に入るとすぐに案内係に声を掛けられた。

「カウンターかホールのご希望は？」

「カウンターで」

圭祐は即答した。僕らは案内された席に座りメニューを広げた。

様々な種類の酒の並ぶ棚をカウンターテーブルで挟んで10席程あるカウンター席、丸テーブルを座り心地の良さそうな椅子で囲んだホール席が20席程。

広い店内に隣の席との間隔をゆったりと取った配置は、高級感を感じる。

いつもチェーン展開しているような居酒屋が行きつけの僕には、踏み込んだことのない世界だった。

一気に大人になったような気分になり、少々高い数字が並んだメニューが余計に僕を酔わせた。

目の前にいる男のバーテンダーに酒とツマミを注文すると、圭祐はバーテンダーに問いかけた。

「今日、あの人がいないんですか？」

バーテンダーは多分僕らより3、4歳年上。

圭祐を覚えていたようで、笑顔で答えてくれた。

「君、先週末来てた子だね。遙ちゃんならもうじき来るよ」
圭祐のお目当ては「遙」というようだ。

彼女目当てで来るお客さん結構多いんだよね、とバーテンダーは付け加えた。

慣れた手付きでシェーカーを振り始めるバーテンダーと会話を続けながら、「遙」の出勤を待った。

ちょうど、僕らの酒が出来上がりカウンターテーブルに出された時だった。

店の奥のドアが開くのが横目から視界に入った。

ドアの奥はスタッフルームのようで、ドアにはスタッフオンリーと書かれたプレートがかかっている。

中にいる誰かと会話をしているようで、ドアから出てきた女性は後ろ姿しか見えない。

僕は、あの人が「遙」かな？と期待に胸を膨らませた。

早くこつちを振り返れ、と思いながら彼女を見ていた。

圭祐はまだ気付かないようで、バーテンダーとの会話に夢中。

僕が「あの人？」と聞こうと思った時だった。

ドアを閉め、彼女が振り返りカウンターへと向かって来た。

僕は見惚れてしまった。

噂通り、とても可愛かったからだ。

いや、可愛いというより綺麗という言葉の方が合っているかもしれない。

彼女がカウンターの中へ入り、僕らの席の前に来るまで僕は彼女を見ていた。

先に僕と圭祐に、その後で男のバーテンダーにも挨拶をした。

柔らかい表情で笑って挨拶をする彼女は、とても感じが良かった。

圭祐が小声で、すごい美人だろ？と僕に耳打ちした。

僕は無言で強く頷いた。

「じゃあ、僕は交代の時間なんで」

とバーテンダーが僕らに会釈をしながら、ヒラヒラと軽く手を振り、スタッフルームへ入って行った。

魅了

バーテンダーがいなくなったカウンターで、慣れた手つきでシェイカーを振り他の客と会話をする遙。

僕は彼女の動きを眺めていた。

「竜弥？もー酔ったの？」

何も喋らなくなった僕の顔を、圭介が覗き込んだ。

僕は彼女を目で追い続けながら、ぼんやりとした口調で言った。

「やつばい、惚れた…」

僕の言葉に圭介はしばらく間を空けて、椅子から立ち上がって驚いた。

「ええっ！？マジで？」

圭介の大声で、遙がこちらを見た。

僕と目が合い、圭介をちらっと見てから僕に視線を戻して彼女はちよつと笑った。

僕は笑顔を返すこともできず、目を逸らした。

胸が苦しいくらい締め付けられているような感覚になる。

「竜弥、お前彼女は？」

圭介はまだ驚いた顔で、僕を見ていた。

「別れたよ、ついこの間」

「おいおい、随分切り替え早いな。もう次の女？」

半分呆れたように圭介が言った。

「俺は過去を引きずらないんだよ」

「ま、いいけどね」

そう言つて圭介はグラスを口に運んだ。

「遙さーん、おかわりくださーい」

圭介が僕を肘で突きながら、彼女を呼んだ。

圭介の声に彼女は笑顔で返事をし、僕等の前に来た。

僕は恥ずかしさから、目を逸らしてしまった。

「何飲みます？」

「チャップリンください。竜弥は？」

圭介が俯いた僕の顔を覗き込んだ。

たぶん僕は今さうとう顔が赤面している。

自分でも解るくらいに。

圭介はそんな僕を見て、また驚いた表情になった。

彼女はシェーカーを振りながら、僕の注文を待っている様子だった。出来上がった酒をグラスに注いで、圭介に差し出した。

「ご注文、決まりました？」

問いかけに顔を上げた僕の目を笑顔で見た彼女から、目を逸らせず。問：はい。マティーニください」

間の抜けた顔で、注文するものなんて考えてなかった僕はとりあえず知っている酒を注文した。

酒を作りだした彼女の視線が僕から外れたことに、ホッとした気持ち半分、寂しさ半分。

なんだ？この気持ち…。

自分でも解らない感情の揺らぎに戸惑う。

どうぞ、と静かに差し出されたグラスを僕が受け取り口に運ぶのを見届けると、彼女は別のお客に呼ばれて行ってしまった。

その後ろ姿に、寂しさを覚え自分の気持ちに驚く。

「圭介、あの何者？」

「何者って…。この前ちよつと聞いたんだけど、25歳、彼氏なし」「マジで！？彼氏いないの？」

一気に僕の気持ちが高まる。

「いないって言うてたよ。本当かどうかは知らないけど。あ、あと
昼間はOLやってるらしいよ」

圭介から情報をもらって、彼女にどう近づこうかと思考を巡らす。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3785c/>

幻想

2010年11月5日01時39分発行